あしたはきっと晴れるや！

日下部　メイコ

最初に目を引いたのは、びっくりするくらいに真っ黒い髪だった。

濡れ羽色とかぬばたまといった形容の似合う真っ黒い髪を目の上でまっすぐにそろえて、後ろは肩甲骨ぐらいまであるのをやっぱりまっすぐにそろえてある。対照的に肌は白い。唇は薄くて目がつり気味で、顔立ちがはっきりしているせいか少し怒っているように見える。

なんだか魔女みたいだなあと私は思った。それでこっそり、みんなのように彼女を『トミーさん』と呼ぶのでなくて心の中で『まじょこさん』と呼ぶことにした。

「ねえねえ、写真どうするよ？」

なかやんに背中をつつかれて、私は椅子を後ろに傾けた。

「遠足のやつ？」

「そうそれ。ほしい写真の番号書いて放課後までに先生んとこって言ってたっしょ」

そう言いながら、『春の遠足（自然公園）②』と書かれたアルバムをぱらぱらめくっている。アルバムに収まった写真はどれも、右上に番号が振られていた。ほしい写真があった場合はこの番号と希望枚数、自分の名前を書いて先生に渡して、焼き増しをしてもらうという流れだ。

「うーん、どうしよう。取りあえず集合写真は一枚買おうかな」

「ああ、だね。あとほかのは？」

「私、写ってるのあったっけ」

身を乗り出して、アルバムを覗く。

「アスレチックのとこで撮ってあるやつに写ってなかった？」

「あ。ほんとだ、いた。ていうかナオすごいね、これ」

ロープでできた大きなジャングルジムの前で五、六人が写っている写真の中に、私も入っていた。そこに一緒に写っている幼馴染の姿に思わず噴き出す。ジャングルジムのてっぺんで仁王立ちしてブイサインだ。

「佐々木はすごいよー。ほとんど全部のに写ってるからね。バイタリティのかたまりだよあれは」

なかやんがページをめくりながらナオの写っている写真を教えてくれる。三、四人で木に登ろうとしているもの、丸太を渡っているところ、お弁当を食べているところ、男子全員で芝生の上でブリッジしているところ、どアップでブイサインなどなど。最後の集合写真でも、真ん中付近の五、六人で肩を組んで満面の笑みだ。その二列うしろの右端あたりに私となかやん、かなっぺ、みっきーがいる。その後ろの列、私の斜め後ろにまじょこさんだ。あごを引いて口角を上げて、大人っぽい笑い方だ。

「どうする？　決まったんならこれ書いて持ってっちゃう

けど」
　なかやんは挟んであったクラス名簿をアルバムから出して目の前でひらひらさせる。みんな希望をすでに出しているようで、なにも書いていないのは私とまじょこさんぐらいだった。
「じゃあ私は集合写真のこれと、あとこれかなあ」
　指差すと、なかやんがささっと名簿に書き込んだ。一枚ずつ？　と確認されて頷く。
　ちょうどそのとき、教室の後ろの戸が開いた。
「あ、トミーさん！」
　なかやんが腰を浮かせて声を張り上げた。
　まじょこさんは今日もきれいな真っ黒い髪をそのまま下ろしていた。見れば見るほど魔女みたいだ。
「これ今日の放課後までなんだけど、もう決まってる？」
　まじょこさんは少し悩んでから首を振った。
「まだ、決まってないの。わたしが最後に書いて持ってくわ」
　そう言って、なかやんから名簿とアルバムを受け取る。なかやんが「よろしく頼んだ！」と言うと、「任せて」とにっこり微笑んだ。

　階段を下りていくと、下駄箱のところにまじょこさんがいた。まじょこさんも帰りかな、と思ったらどうやら違うようだ。

　下駄箱に近づいて一瞬立ち止まって離れる。かと思えば少し歩いて廊下をちらっとうかがって立ち止まる。そしてまた下駄箱に近づく。これのくり返しだ。うろうろしている。なんだろ。なにやってんだろ。
「どうしたの？」
「っひ⁉」
　裏返った声が上がった。振り返ったまじょこさんは顔が真っ赤で、目が泳いでいる。私のほうがびっくりして目を丸くした。こんなにおどろかれるなんて思わなかった。
　そのとき、びょおう！　と突風が昇降口から入ってきた。グラウンドの砂混じりの風が容赦なく顔にぶつかってくる。思わず目を閉じた。少しして風がおさまってからもう一度開けると、そこにはいつも通りのまじょこさんがいた。顔も赤くないし、目線もしっかりと私を見据えている。
「すごい風だったね」
「そうね」
　まじょこさんは真剣な顔で頷いた。少し眉間にしわを寄せて、口を引き結んでいるから、なんだか怒っているように見える。目尻がほんのり赤いように見えるのは気のせいだろうか。どうしたんだろ。
「下駄箱、どうかしたの？」
「なにが？」
「え、えと。さっきからずっとうろうろしてたから、どうしたんだろうって思って……」
「気のせいじゃない？」

まじょこさんがそっけなく言って、ふいとそっぽを向いた。

私は黙り込んだ。気のせいってどういうことだろか。頭をぐるぐるさせていると、まじょこさんがぎゅうっと鞄と手に持っている折りたたみガサを握り締めたのが見えた。胸の前に持ってきて、抱きしめるようにしている。力を入れ過ぎているのか、青いカサは小刻みにぶるぶる震えている。どうしたんだろうと思ったけど、カサのほうが私の意識に働きかけた。なんか見覚えあるな。

「あれ、そのカサ、」

「――だぁああっ!!」

まじょこさんがカサを振りかぶって投げた。ひゅん、と耳の横を風の切る音が聞こえた。がごんっと鈍い音が響く。

へ、と思って真横を見ると、カサが下駄箱にめり込んでいた。見事にへこんでいる。この下駄箱って金属製だったような。

私が下駄箱を観察しているうちに、まじょこさんは全力で昇降口を駆け抜けていってしまった。「うあああ」と絶叫する声が聞こえるが、それをかき消すように大風がびゅうびゅうと吹き荒れている。砂が舞い上がって、外が少しかすんで見える。すごい。

私は我に返ってめり込んだカサをつかんだ。苦心して引っ張り出してから柄のところを見て、さっきの見覚えが勘違いでないことを確信する。

黒い柄の部分に白いペンで書かれた、右上がりの癖のある文字。『佐々木直人』。

私は腕組みをして首をかしげる。

「なんでナオのカサ持ってたんだろ」

しかし、金属製の下駄箱にめり込んだのに壊れないカサってすごいな。

私は鞄にカサをしまいながら、しげしげと下駄箱のへこみを眺めた。

……あれ。

私は机にしまった教科書とノートを順繰りに上から調べて、動きを止めた。まさかと思って、今度は机の中から全部出して一冊一冊確認する。え、あれ。

机の横の鞄を膝の上に乗せて、口を思い切り開け中を探る。いつも教科書類を入れておくところは空っぽだし、ほかの小さい収納ポケットには入らないし。まさか。そんなはずは。

「ほれ、これ」

ぺん、と机の上にノートが放られた。表紙には『英語』のでかでかとした見覚えのある文字。あ。

「あった！」

ナオがやれやれと言いたげにどっかりと隣の席に腰を下ろした。

「昨日、うちに忘れてっただろ。届け物しに来たのに忘れ物してってどーんだよ」

ごめんごめんありがとー、とナオに感謝の念を示しつつノートを広げた。そうか、カサを届けに行ったときか。
「せっかく勉強したのにもったいねー」
「だからごめんて。あ、今日ユウさんいるよね？」
「ああ。あっちもテストだから、たぶん帰ったらいるんじゃね？」
「じゃあ今日は、数学見てもらおうかなあ」
そうこうするうちに予鈴が鳴った。じゃあ帰りに、とナオが言って自分の席に戻る。よろしく、と手を振って、私はノートの文字を目で追った。

放課後、鞄をかけたナオと連れ立って教室を出る。どうだったよ？　と訊かれてなんとも曖昧な笑みを浮かべながら私は眉尻を下げる。せっかく昨日、英語を見てもらったのに、正直なところあまり手ごたえはない。せっかくなあ。数学、がなんとかなればいいんだけど……。
「あ」
私が立ち止まると、ナオが不思議そうな顔で振り返った。
「なんだよ？」
「問題集。忘れた。取ってくるから先に行ってて」
おー了解、とナオの声を背中に聞きながら、私は引き返した。テスト中だからグラウンドには誰もいない。もちろん校舎の中にも人気はほとんどなくて、私が廊下を小走りに行く音しかしなかった。けれどもしんとした場所でうるさくするのはなんとなくはばかられて、途中からなるべく静かに歩いた。階段を上りきって、一番奥の教室の戸を引く。
から、と開けて私は立ち尽くした。まさか人がいるとは思わなかったからだ。教室の中にいた人にとっても私の登場は予想外だったらしく、固まっている。椅子に座って机に突っ伏して、顔をこちらに向けて目が真ん丸く見開かれている。無言のまま見つめ合うこと数秒。先に我に返ったのは相手のほうだった。
「あぁぁあっっ!!」
ばっと立ち上がり椅子を引き倒す。衝撃で椅子がバウンドした。がらんがたんっと派手な音を立てながら、『佐々木直人』のネームシールが貼られた背もたれを上にしてひっくり返る。しかし彼女はそんなことにかまわず私の横を走り抜けていった。真っ黒い長い髪の残像が目の端に写り込む。すぐに、だだだ、だん、とものすごい勢いで階段を下りていくのが聞こえた。
あっけに取られていると、靴の先になにかがぶつかったので床を見る。生徒手帳が落ちていた。これ、まじょこさんのじゃ。
私は生徒手帳を拾い上げて駆け出した。
窓からちらりと見えた空はすっかり暗くなって、遠雷が小さく聞こえ始めていた。

昇降口を出ると学校の裏山のほうに走っていくまじょこさんが見えたので、私もあとを追って走った。学校の裏の

小道を通って踏み入れた裏山は、木々が鬱蒼として全体的に薄暗く、蔦のようなものが縦横無尽に地面を這っていた。ぎゃっぎゃっぎゃと鳥なのかなんなのか、動物の薄気味悪い鳴き声が聞こえてくる。

……学校の裏山って、こんなんだったっけ？

とりあえずまっすぐ進もう。細い獣道のような、踏みしめられた草の上を駆けていく。

裏山はあちこち隆起が激しく、三メートル程度の崖になっているところや、ぽっかり開いた洞窟らしき穴、しだが生い茂った巨岩の埋まった地面やら、表面が苔むした古木がそこかしこにあった。なんだかどこかの密林のようだ。

少し行くと、獣道より少しそれた場所からがさがさっと音がした。見れば、茂みの中を走っていくまじょこさんの後ろ姿があった。

「あ、待って！」

「わあああ！　なっ、こ、来な……っ」

振り向いたまじょこさんは絶叫して、さらに走ろうとしたようだった。けれども前方不注意。木の根にけつまずいて、べしゃあと顔から地面に転んだ。う、痛そう。

「だ、だいじょうぶ？」

「放っておいてー!!」

そんなこと言われても。

でも、と口を開きかけたら、真っ黒くたれ込めていた空がまぶしく光った。どおん……と低音が重く響く。

あ、雷。と見上げれば、すぐに大粒の雨が顔を叩いて、見る見るうちに雨足は強まってくる。

「は、早く帰んないと……！」

立ち上がって顔を雨からかばいながらぐるりを見回して、すうっと冷や汗が背中を伝った。あれ、ここどこ？

そうこうしているうちにも雨はどんどん強くなって、バケツをひっくり返したような勢いになってきた。これは帰るより、どこかで雨宿りしたほうがいいかもしれない。

座り込んでいるまじょこさんに呼びかけた。

「さっき洞窟あったから、そこで様子見て帰ろ！」

洞窟は思ったよりも広くて、雨はしのげそうだった。雨が吹き込む入り口から少し奥まったところにふたりで腰を落ち着ける。スカートからなにから、立っているだけで水が滴った。すっかりびしょびしょでがっかりする。クリーニングかなあ。今日まだ水曜日なのに。明日からなに着ていこう。

私はふと目線を上げて、向かいに座っているまじょこさんを窺った。立てた膝に頭を載せて、外を眺めている。移動している間からずっとだんまりだ。

「あ、あのね」

ごそごそスカートのポケットを探った。ぐっしょりした布の感触にうんざりする。うーん、これはもしかしたら生徒手帳、濡れちゃったかな。指でつまんだだけじゃあわからないけど。

まじょこさんは眉をひそめて私を見ている。なんだか不

機嫌そうだ。私はまだごそごやっていた。水を吸って生地が縮んだのかなんなのか、なかなか生徒手帳が取り出せない。

「ちょっと待ってね」

一度断りを入れてから、片手でスカートを押さえもう一方で生徒手帳を引っ張る。乾いているときでさえポケットに生徒手帳の大きさはほぼジャストだから、こんな状態では苦労もひとしおだ。まじょこさんの表情がだんだん不審げになってきた。角さえ出せれば、あともうちょい、なんだけど……、

「あっ」

ぽーん、手帳が飛んだ。力を入れ過ぎたらしい。反動できれいな放物線を描く。

ぱさ、と落ちたのは、ちょうど私とまじょこさんの中間ぐらいの位置だ。ぱらりと背表紙のところがめくれる。

ぴしゃーん！　と外で雷がとどろいた。閃光が洞窟の中をフラッシュでもたいたみたいにまぶしく照らした。ごろごろ……と不穏な音が長く低く尾を引いていく。

洞窟の中は稲光のあとまた薄暗くなった。それでも、さっきの一瞬で私には生徒手帳に挟んであるものが見えていた。釘づけだった視線をゆっくりまじょこさんに移す。

「……あの、」

「……」

まじょこさんの顔にみるみる血が上っていくのがはっきりわかった。

「っ、――ぁあああぁあ!!」

絶叫とともに、まじょこさんが外に飛び出した。一メートル先もわからないような豪雨の中だから、すぐににまじょこさんの背中は見えなくなった。

外と洞窟の中と。忙しなく視線を動かす。迷ったけど、かがんで生徒手帳を拾い上げ私もまじょこさんのあとを追って雨の中に飛び出した。

「待って！」

私はポケットのあたりを手で押さえて、生徒手帳が――その中のナオの写真が、濡れないように走り出した。

けれども雨は予想以上の強さで、前はおろか右左さえもよくわからないありさまだった。自分がいったい今どこを目指して進んでいるのか、そもそもまっすぐ走れているのかさえ怪しいぐらいだ。

ずるうっと靴の底が滑った。やばいと思ったときにはもう手遅れで、視界が反転していた。雨が垂直に目や顔を叩くのを感じる。同時に重心が心もとなくなる。投げ出されたような。

衝撃が背中から全身に走った。思わず息をつめる。濡れた地面の感触がじんわりしみた。痛い。けども、まじょこさんを追いかけなければ。

「――！」

悲鳴が聞こえた。気がした。勘だけを頼りに声のしたほうへ方向を変える。木の根や蔦が足を引っかけて何度か転びそうになったけども、少しすると人影らしいものが目に

入った。うずくまっているように見える。沼か池のような場所にいるようだ。あれはまじょこさん？　でももしかしたら切り株や岩かもわからない。
　なんと呼びかけるか迷って、恐る恐る口を開いた。
「だいじょうぶ？」
「こ、来ないで！」
　ばしゃん、と雨音ではない音がして、まじょこさんが立ち上がったのがわかった。私はスカートの上から生徒手帳をぐっと押さえる。
　ごうごうと雨風はますます強くなる。
「えとあの……あれはその、ナオのこと、す」
「あぁぁっ‼」
　突風がぶつかってきた。圧力に思わずよろめく。
　まじょこさんが叫んだ。
「お、幼馴染が結ばれる法則だって知ってるし、漫画とかでたくさん読んできたから理解してる！」
　強風と、かたまりのような雨粒が全身を殴る。ばちばちと叩かれて、痛いほどだ。
「ふ、ふたりで勉強したり、一緒に帰ったりして、もう私の入る隙なんかなくてっ、うまくいく望みなんてなくって！　でもっ、うまくいきっこなくても、そういうふうに思うのぐらいはっ」
　私はまぶたを持ち上げて、目を見開いた。ぼつぼつ大粒の雨が目玉を叩く。前が見えなかった。まじょこさんがどんなふうに、どんな顔でこちらを向いているのかわからない。豪雨と強風で、鼓膜がびりびり震える。
「私、彼氏いるよ」
　暴雨の中なのに、不思議と私の声はよく通った。
「え、え？」
　ふいに雨足が弱まった。つぶてがぶつかってくるようだったのが、小石程度になり砂粒程度になり、霧のようになった。雨音はもう聞こえず、風も立ち消える。黒かった雲が白く明るくなっていく。
　私は続けて言った。
「あのね、私、ナオのお兄ちゃんとつき合ってるんだよ。だから、」
「あ、え？　ええ？」
　まじょこさんが理解できないというように目をしばたかせて頭を振った。思わずのようにあと退る。一歩、下がったその瞬間、まじょこさんの身体が後ろに大きく傾いだ。
「危な――！」
　とっさに地面を蹴った。投げ出されたようになった腕をつかむ。けれども雨でぬかるんだ足場では踏ん張りなどきくはずもなく。
　すぐ目の前に水面が見えたと思った次には、全身が水の中にあった。
「――ふはっ、」
　底に足をついて顔を持ち上げる。息を吸い込むのと一緒

に水が入って少しむせる。もうどこもかしこもどうしようもないほどびしょびしょのぐしゃぐしゃだったけど、見上げれば雨はすっかり上がっていた。暮れ始めた空が見える。

「まじょこさん！」

私は水をかきわけて、ずいっと前に出る。咳き込みながら、ぜいぜいと肩で息をしていたまじょこさんの手を思い切りにぎった。まじょこさんは不意を突かれたようで、目を真ん丸くした。

ぽたぽた毛先から滴る水に太陽が反射した。雲がひいて、空は嘘みたいに晴れて広々としていた。西の空が色づいている。きれいなオレンジ色は目に残って、明日はきっと晴れるんだろうな、と思った。

「私、応援するから！」